

研究プロジェクト

察するコミュニケーションと表すコミュニケーション

宮本百合 (ウィスコンシン大学准教授)

■本研究の目的

コミュニケーションを行う際、人は言葉だけでなく、表情・身振り・状況などの手がかりも用いてお互いの感情や意図を伝えあい、理解しあっている。このようなコミュニケーションは、非言語的コミュニケーションと呼ばれている。低コンテクスト文化である欧米では、直接的で明確な言葉を用いた言語的コミュニケーションが多いのに対して、高コンテクスト文化である東洋では、間接的で周辺的情報などの手がかりを用いた非言語的コミュニケーションが多いことが、文化人類学者のHallらによって示唆されてきた。とはいえ、欧米においても、表情などの非言語的な手がかりは、言葉の内容以上に重要であることが指摘されている。

この一見矛盾する知見を理解するために、ウィスコンシン大学大学院生アマング・エゲンと心の未来研究センター内田由紀子准教授と私は、非言語的コミュニケーションの目的の違いに注目して研究を行っている。自己を表現することが重視されている欧米では、自らの意図や感情を他者に対して明確に「表す」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。一方、相手や周りに自分を合わせることが重視される日本では、他者の意図や気持ちを「察する」ことが非言語的コミュニケーションの主な目的であると考えられる。だとすると、非言語的コミュニケーションの性質は文化によって異なっている可能性がある。自らの意図や感情を表すことが主な目的である欧米では、送り手が自らの意図や感情を比較的直接的に表現できる身体的な手がかりが用いられがちなのに対して、他者の微妙な意図や感情を察することが主な目的である東洋では、場の雰囲気などの、間接的で文脈的な手がかりが用いられがちであると

表1 非言語的コミュニケーションの媒体

身体的媒体	文脈的媒体	その他
表情(笑顔、しかめっつらなど)	状況(天気、場の雰囲気など)	言い方(語調、間など)
振る舞い、ボディランゲージ(鼻歌、うつむく、ため息など)	その状況にいたらたいの人がどのように感じるか	間接的な言葉
	実際に経験している状況を見て	

いう仮説を立て、それを検証するために日米で調査を行ってきた。

■これまでの活動

ウィスコンシン大学のアメリカ人学生と、京都大学の日本人学生を対象とした比較調査を行った。まず参加者に、自らが実際に経験した非言語的コミュニケーション場面を想起し詳しく記述してもらい、その後、様々な非言語的コミュニケーション媒体(表1参照)をどの程度用いたかを評定してもらった。図1からわかるように、アメリカでは送り手が自らの感情・意図を表現できる身体的媒体が他の媒体より多く用いられているのに対して、日本では身体的媒体も用いられていたものの、場の雰囲気などの文脈的な媒体がアメリカよりも多く用いられていた。

このような結果は、非言語的コミュニケーションの媒体に文化差があることを示しているが、伝達される内容にも文化差はあるのだろうか。その点を調べるために、参加者に記述してもらった場面の内容を分析した。その結果、アメリカでは約90%、日本では約50%の非言語的コミュニケーションにおいて、好意・怒り・悲しみなどの明確な感情が伝達されていたのに対して、日本の約40%、アメリカの約10%の非言語的コミュニケーションが、「時間がないので急いでいる」といった、送り手の必要性が伝達された場面であった。

■まとめ

これらの結果から、アメリカでは、送り手が自らの感情を積極的に表現す

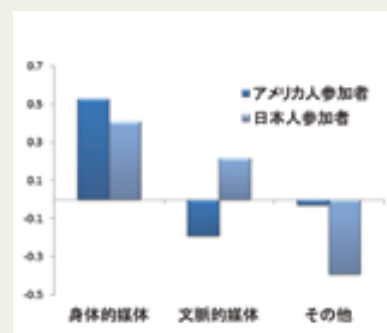


図1 非言語的な媒体が用いられる相対的程度

るために、身体的媒体を用いた非言語的コミュニケーションが多く使われているのに対して、日本では、送り手の必要性を察するために、場の雰囲気などの文脈的媒体を用いた非言語的コミュニケーションが多く使われていると言える。つまり、非言語的コミュニケーションは日米のどちらにおいても重要であるものの、その目的や用いられる非言語的な手がかりには、文化間で差があることが示された。

従来、非言語的コミュニケーションは、欧米よりも東洋において多く用いられていると示唆されてきたが、本研究の結果に基づけば、非言語的コミュニケーションのどの側面に注目するかによって、欧米の方が東洋人よりも非言語的コミュニケーションを多く用いる場合もあることが示唆される。

今後は、本研究をさらに進めて、文化間で性質の異なる非言語的コミュニケーションに参加することで、異なる心的傾向が促進されるようになるかどうかを検証する予定である。